じゆりあの・吉助

芥川龍之介

一

じゅりあの・吉助は、肥前国彼杵郡浦上村の産であった。早く父母に別れたので、幼少の時から、土地の乙名三郎治と云うものの下男になった。が、性来愚鈍な彼は、始終朋輩の弄り物にされて、牛馬同様な賤役に服さなければならなかった。

その吉助が十八九の時、三郎治の一人娘の兼と云う女に懸想をした。兼は勿論この下男の恋慕の心などは顧みなかった。のみならず人の悪い朋輩は、早くもそれに気がつくと、いよいよ彼を嘲弄した。吉助は愚

物ながら、悶々の情に堪えなかったものと見えて、ある夜私に住み慣れた三郎治の家を出奔した。

それから三年の間、吉助の消息は杳として誰も知るものがなかった。

が、その後彼は乞食のような姿になって、再び浦上村へ帰って来た。そうして元の通り三郎治に召使われる事になった。爾来彼は朋輩の軽蔑も意としないで、ただまめまめしく仕えていた。殊に娘の兼に対しては、飼犬よりもさらに忠実だった。娘はこの時すでに婿を迎えて、誰も羨むような夫婦仲であった。

こうして一二年の歳月は、何事もなく過ぎて行った。

が、その間(あいだ)に朋輩は吉助の挙動に何となく不審(ふしん)な所のあるのを嗅(か)ぎつけた。そこで彼等は好奇心に駆られて、注意深く彼を監視し始めた。すると果して吉助は、朝夕(あさゆう)一度ずつ、額に十字を劃して、祈禱を捧げる事を発見した。彼等はすぐにその旨を三郎治に訴えた。三郎治も後難を恐れたと見えて、即座に彼を浦上村の代官所へ引渡した。

　彼は捕手(とりて)の役人に囲まれて、長崎の牢屋(ろうや)へ送られた時も、さらに悪びれる気色(けしき)を示さなかった。いや、伝説によれば、愚物の吉助の顔が、その時はまるで天上の光に遍照(へんしょう)されたかと思うほど、不思議な威厳に満

ちていたと云う事であった。

二

奉行の前に引き出された吉助は、素直に切支丹宗門を奉ずるものだと白状した。それから彼と奉行との間には、こう云う問答が交換された。

奉行「その方どもの宗門神は何と申すぞ。」

吉助「べれんの国の御若君、えす・きりすと様、並に隣国の御息女、さんた・まりや様でござる。」

奉行「そのものどもはいかなる姿を致して居るぞ。」

吉助「われら夢に見奉るえす・きりすと様は、紫の大振袖（おおふりそで）を召させ給うた、美しい若衆（わかしゅ）の御姿（おんすがた）でござる。まったさんた・まりや姫は、金糸銀糸の繍（ぬい）をされた、襠（かいどり）の御姿（おんすがた）と拝（おが）み申す。」

奉行「そのものどもが宗門神となったは、いかなる謂（いわ）れがあるぞ。」

吉助「えす・きりすと様、さんた・まりや姫に恋をなされ、焦（こが）れ死（じに）に果てさせ給うたによって、われと同じ苦しみに悩むものを、救うてとらしょうと思召し、宗門神となられたげでござる。」

奉行「その方はいずこの何ものより、さような教を

伝授（でんじゅ）されたぞ。」
吉助「われら三年の間、諸処を経めぐった事がござる。その折さる海辺（うみべ）にて、見知らぬ紅毛人（こうもうじん）より伝授を受け申した。」
奉行「伝授するには、いかなる儀式を行うたぞ。」
吉助「御水（おんみず）を頂戴致いてから、じゅりあのと申す名を賜（たまわ）ってござる。」
奉行「してその紅毛人は、その後いずこへ赴いたぞ。」
吉助「されば稀有（けう）な事でござる。折から荒れ狂うた浪を踏んで、いず方へか姿を隠し申した。」
奉行「この期（ご）に及んで、空事（そらごと）を申したら、その分に

はさし置くまいぞ。」
吉助「何で偽などを申上ぎようず。皆紛れない真実でござる。」
奉行は吉助の申し条を不思議に思った。それは今まで調べられた、どの切支丹門徒の申し条とも、全く変ったものであった。が、奉行が何度吟味を重ねても、頑として吉助は、彼の述べた所を飜さなかった。

三

じゅりあの・吉助は、遂に天下の大法通り、磔刑に

処せられる事になった。

その日彼は町中（まちじゅう）を引き廻された上、さんと・もんたにの下の刑場で、無残にも磔（はりつけ）に懸けられた。

磔柱（はりつけばしら）は周囲の竹矢来（たけやらい）の上に、一際（ひときわ）高く十字を描いていた。彼は天を仰ぎながら、何度も高々と祈禱を唱えて、恐れげもなく非人（ひにん）の槍（やり）を受けた。その祈禱の声と共に、彼の頭上の天には、一団の油雲（あぶらぐも）が湧き出て、ほどなく凄じい大雷雨が、沛然（はいぜん）として刑場へ降り注いだ。再び天が晴れた時、磔柱の上のじゅりあの・吉助は、すでに息が絶えていた。が、竹矢来（たけやらい）の外にいた人々は、今でも彼の祈禱の声が、空中に漂っている

ような心もちがした。

それは「べれんの国の若君様、今はいずこにましますか、御褒め讃え給え」と云う、簡古素朴な祈禱だった。

彼の死骸を磔柱から下した時、非人は皆それが美妙な香を放っているのに驚いた。見ると、吉助の口の中からは、一本の白い百合の花が、不思議にも水々しく咲き出ていた。

これが長崎著聞集、公教遺事、瓊浦把燭談等に散見する、じゅりあの・吉助の一生である。そうしてまた日本の殉教者中、最も私の愛している、神聖な愚人

の一生である。

（大正八年八月）

底本：「芥川龍之介全集３」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８６（昭和61）年12月１日第１刷発行
　　１９９６（平成８）年４月１日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月〜１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：earthian
１９９８年12月28日公開
２００４年３月８日修正